



アクセルとブレーキ

山武市立成東小学校長 うちだ じゅんいち
内田 淳一



1 昔話を少し

50年も前の話である。

父親が研修視察で外国に行くことになった。日本から遠くない某国への旅。父親は初めての海外ということもあって、事前にいろいろ調べたのだろう。その時のこんな話を今もよく覚えている。

その国の人は、皆いい人のようだ。例えばホテルでゴミを捨てても、あとで持ち主に返ってきてしまうらしい。要らないものには「不要」と書いて捨てるのだと。

たまたまそのホテルがそうだったのかもしれない。でもなんとなくではあるが、某国の国民性というか、雰囲気というか、そういうことが感じとれた。

そして50年が経った。某国は今、どうなっているか。どうも、かつての雰囲気は感じられない。いい意味でも悪い意味でも、個人中心の国に変わってきたように思う。

某国の変容。それは教育の力だ、と私は思う。某国は、人の考え方、行動規範について、それまでとは大きく異なる方向に舵を切った。そして、そのことを地道に教育し続けた結果、今の国民性が育った。一つにまとまって同じ方向で教育すれば、こういう成果が出せる。その証左だと思う。コロナ禍にあっても、迷うことなくぶれずに実践すれば、成果は出る。継続は力。そう信じるのが大事なのだと思う。

2 学校経営の難しさ、楽しさ

働き方改革が叫ばれる今、学校は、あれも取り組もう、これも取り組もうと、活動を増やすだけではうまくいかない。コロナ禍においてはなおさらだ。

感染症対策については、学校はこれまでの取組で、そのノウハウをある程度学んできている。感染の拡大が進んできたとき、どの程度ブレーキを踏めばよいか、その匙加減は随分と蓄積されてきた。

しかし感染症が広がってきても、アクセルも踏まなければならない。「主体的・対話的で深い学び」の授業改善やGIGAスクール構想に係る1人1台端末の活用等、新しく取り組まなくてはならない内容が山積している。新たな内容の充実に向け、活動をさらに加速させていく必要がある。そのためのアクセルを踏み込みながら、同時に感染症対策をとり、かつ働き方改革も推進する。

今、校長には、アクセルとブレーキを同時に踏むような舵取りが求められている。でも、そんなに難しいことだとは思わない。多分、このアクセルとブレーキは、真逆ではない。同じ方向に作用し、互いに補完するようになっているはずだ。

3 本年度の取組

本年度、体育の公開研究会を行った。地域の学校で体育研究の輪番が決まっている。市の指定研究にもなっている研究会だ。

公開研究会といっても、特段珍しい内容に

取り組んだわけではない。奇をてらわず、職員は体育授業に必要なことを学び、真面目に実践した。全ての職員が協力して取り組み、その成果を共有できた。Webによる研究会の運営についても提案できたように思う。



3年生 ハンドボールの授業

ところで、実はその中で、私は私なりに取り組んだことがあった。体育の研究テーマとは別に、次のようなテーマで研修に取り組んでいたのだ。それは、「働き方改革の時代における職員研修の在り方」。換言すれば、「職員全体で取り組む研修を、どこまでスリム化できるのか」ということだ。

公開研究会では、あれもこれもと取組が膨らんでいくのをよく見かける。小学校では、しばしばあることだ。熱心さゆえのことなのだと思う。雪の坂道を転げ落ちる雪玉のように、どんどん大きくなって止められなくなることが多い。

私の勤務校も同じような状況だった。様々な方面から指導を受け、指導案に盛り込みたい内容が増え続けた。また授業の掲示物やワークシート、その評価、教材教具の工夫など、勉強にはなるが、いくら時間があっても足りなくなる恐れがあった。

せめて指導案だけでも、もう少し効率的にできないか。そう研究主任に指示して、省ける部分を削った。また項目を統合できるところなどを探し、分量を大幅に減らした。

特に「児童の実態」の部分は、大幅な見直しを行った。それまで、クラス全児童の調査結果を示し、その考察や個々の対応を記載していた。それを今回は、項立てそのものをなくし、「本時の指導」の中に、配慮すべき児童とその対応について簡潔に記載するように改めた。この作業が、実態調査の意味を再確認することになった。



5年生 ティーボールの授業

実態調査自体は行っている。だから、実際の業務量が大きく減ったわけではない。しかし、前向きに省く取組の一つにはなった。

研修をこのような観点で進めることは、私にとって初の試みだった。効率化のためのブレーキをかけたつもりが、結果として、基本的な考え方を学び直すことにつながった。これは大きな成果だった。

4 興味関心に基づく研修

教員全員が共通のテーマで取り組む形の研修でなく、個々の教員が興味関心に基づいて行う研修もある。そういう研修は、アクセルの踏み放題。好きなだけ行えばいい。若いとき、私は夢中になって取り組んだ。

管理職は、ぜひ研修の効率化に取り組んでほしい。それと同時に、こういう研修の後押しもしてほしい。このようなアクセルとブレーキの両踏みは、きっと楽しい作業になる。



感染対策からの学びと今後に向けて

県立銚子特別支援学校教頭 わきた ひろふみ 脇田 裕文



1 はじめに

本校は、千葉県北東部に位置し、太平洋の大海原を望む「屏風ヶ浦」の上に建つ。周囲をキャベツ畑に囲まれた、大変自然豊かな地域である。



太平洋を望む

昭和38年に銚子市立養護学校として開校し、昭和54年に千葉県に移管され県立の特別支援学校となった。令和4年度には60周年を迎える、歴史ある学校である。

肢体不自由教育と知的障害教育の二つの教育課程を編成し、訪問教育や巡回での通級による指導（肢体不自由・視覚・聴覚・病弱教育）も行う、総合的な教育機能を有する特別支援学校である。幼稚部、小学部、中学部、高等部に幼児児童生徒91名が在籍しており、寄宿舎も設置されている。

2 感染対策からの学び

(1)基本的な感染対策

令和2年度、緊急事態宣言が発令されていた4月、休校中で生徒等が不在の中、新任教頭として着任した。校長の指導の下、教務部

を中心に、各学部主事等とともに感染対策について話し合い、生徒等が登校する前に様々な対策を講じた。職員室と教室の机には個々にパーティションを置き、スクールバスの座席間にビニールカーテンを設置し、全ての教室と特別教室、舎室の入口には、アルコール消毒スプレーを置いた。参集での会議の削減、分散での学習活動や給食など、可能な限り密を避けられるようにした。

(2)学習の保障

生徒等の学習の保障のために、学習プリントの郵送、電話連絡、家庭訪問や動画配信等を行った。動画制作に当たっては、学校再開後の学習活動がスムーズに行える内容に絞って制作した。校歌、クイズ、日常生活のこと、音楽、体育、自立活動、作業学習などと多岐にわたり、その数は、約50本にもなり、総再生回数は約12,500回となった。

(3)継続した感染対策と今後の教育課程

感染対策として様々な制限があったが、動画配信は、学習の保障になるとともに、長期にわたる休校による教師の疲弊感の払拭にもなった。また、教師がこれまでの学習活動を振り返るよい機会ともなった。生徒等の理解をどのように図るのか、丁寧に分かりやすい説明とはどのようなものかなど、一人一人の実態を基に教師同士が話し合い、試行錯誤し、アイデアを出し合いながら学習活動を見つめ直すことができたと感じている。また、可能な限り密を避けるため、少人数での学習活動を検討する必要がある、単元の見直しや題

材の変更、行事の精選なども行うこととなった。これらは、新学習指導要領にある、「教育課程に基づき組織的かつ計画的に学校の教育活動の質の向上を図る」ため、学校教育目標の重点の一つである「教育課程のスリム化と充実」を実現させるとともに感染対策にもなる。小集団にすることで、一人一人により焦点を当てることができ、活動内容がさらに充実したものになると考える。

今後の感染状況は、不透明である。たとえば感染が収束したとしても、単にコロナ禍以前の教育活動に戻そうとするのではなく、基本的な感染対策を講じながら、「教育課程のスリム化と充実」の実現を目指す必要がある。

3 心がけていること

(1)自分なりに関わる

着任して、登校が再開されると、まず生徒等の名前と顔を覚えることから始めた。時間の許す限り教室を回り、生徒等に話しかけたり担任から様子を聞いたりした。一人一人に応じた関わりを続けることで、様々なやり取りをするようになり、また、あえて自分にしかできない関わり方をしたことで、普段は見られない様子も少しずつ見られるようになった。今後も、日々の成長を信じ、担任とともに様々な関わりをしていきたい。

(2)人材育成のために

生徒等の実態を知り、一人一人に応じた教材や学習内容を用意することで、よりよい授業づくりができる。そうすることで、生徒等が日々の授業を楽しみ、心待ちにし、毎日の学校生活を充実して過ごすことができると考えている。

生徒等の実態が少しずつ分かるようになり、「実態に対して、どのような支援がよいか」と、教師に問いかける機会を増やしている。放課

後に教室を回り、授業準備中の教師に、「何故そうするのか、どのような姿を願っているのか」などと言葉をかけ、意図等を聞いた上で助言を行っている。多くの教師の考えや意図、アイデアに自分も刺激を受け、今後の活躍に期待しつつ、よりよい授業づくりのため、継続した助言を続けていきたい。

(3)より安全で安心な学校に

これまでも、安全で安心な学校づくりが行われてきた。しかし、入学や卒業による実態の変化や教職員の意見を基に、より安全で安心な学校づくりを常に行う必要がある。教室間移動や学習活動等において起こる事故に対して、現場で事故の要因や防止策等について検討した。また、1か月に1回行われる安全点検を基に、校内で直すことができるところは、分掌係に任せるだけでなく、自分でも直すようにした。不具合が生じていることで、直接事故につながることも考えられる。同じ事故が起きないように、自分の目で確かめ、迅速に行動し、学習や生活環境を整えられるように危機管理の意識を高めていきたい。

4 おわりに

執筆に当たっては、これまでの自分をじっくりと振り返り見つめ直す、大変貴重な時間であった。

教頭として2年が終わろうとしているが、未だ職務内容を把握しきれていないのが正直なところである。学校運営に関しては、学ぶべきことがまだ多くあるため、校長の指導の下、教職員の意見や考えを傾聴しながら、さらに自己研鑽していきたい。

これからも、自分自身が教頭職であることを楽しみながら、生徒等や教職員と多く関わり、生徒等に寄り添い、教職員を支えながらともに学校運営に尽力していきたい。



「対話」の力が生み出す チーム学校

船橋市立習志野台第二小学校主幹教諭 すずき 鈴木 ともこ 智子



1 はじめに

教務主任として3年目となり、主幹教諭としては2年目を迎えた。学校現場では日々様々な課題に直面することもあるが、本校は職員間の雰囲気や風通しがよく、行事等では教職員が一丸となって取り組めるチーム力が強みである。この強みをいかし、校長・教頭の指導の下、学校教育目標の具現化を目指して学校運営に携わっている。

2 対話を通してつくる人間関係づくり

(1)若年層教員との対話

本校は、職員の4割を若年層教員が占めている。若年層教員との対話ではサーバントリーダーシップを意識して接するように心がけている。相手の様子をよく見て、日々の学級の現状や校務分掌の進捗状況などを話題に挙げ自ら話す機会を作るようにしている。自分から寄り添うことで対話のきっかけを作っている。相手の思いや悩みに耳を傾け、自分事として一緒に考え、答えを導き出すことで信頼関係の構築を図っている。そういった日々の何気ないやり取りから困難に直面したときに早急に情報共有ができるよさがあり、場合によっては学校全体での対応へとつながっている。

(2)管理職との対話

教育活動を円滑に進めていくためには見通しを持った計画が必要である。校長・教頭の指導の下、先を見通した立案を日々心掛けている。毎週月曜日の朝は必ず校長・教頭と打合せを行い、2週先の予定を提示し、学校全体の動きを確認する時間を設けている。その他にも生徒指導の諸問題や教職員が困ってい

ることについての情報を対話を通して伝え合うことで、今後どのように対応していくか役割分担を明確に行うことができる。校長・教頭の指導・助言を受け、それらを教職員に広げていくことで、組織的な教育活動を進めていくことができる。それにより教職員が一丸となって同じ方向を向いて様々なことに取り組むことができている。

(3)保護者・地域との対話

校長が掲げている学校経営方針の一つである「開かれた学校づくりの推進」に向けて保護者との対話も大切にしている。保護者の思いや悩みに耳を傾け、管理職に報告したり担任に伝えたりしている。時には教育相談に同席したり、スクールカウンセラーと保護者、学校が連携したりして、児童の健全な育成に努めている。地域に対しては直接対話する機会が限られているため、Webサイトとブログを活用して学校の情報発信を日々行っている。学校行事や児童の頑張り、教職員の努力を伝えることで学校への理解を深めることができている。

3 おわりに

これまで私自身も多くの先生方に育てられ、支えてもらってきた。たくさんの人とのつながり、そこから生まれる「対話」から多くのことを学ばせてもらってきた。今後も「対話」の力が生み出すチーム力の向上に取り組み、相互理解を図ったり、人と人をつないだりしながら「チーム学校」として組織が円滑に機能するようにしていきたい。そのためのかけ橋となれるように様々なつながりを大切に、学校のために努力していきたい。



子供と共に学び続ける

松戸市立和名ケ谷小学校教諭 みぞぐち あや 溝口 文



「算数が、わかってきた」と、話す児童の声に、私も嬉しくなった。現在、1年生の担任をしている。1学期は「こんな学校やめてやる」と大声を出したり、椅子に座れなかったりしていた児童だ。集中して取り組めないときには、姿勢を整えてあげて「一緒にやってみよう」と声をかけても、「面倒くさい」と言って鉛筆を持とうとしなかった。それでも、一緒に鉛筆を持って書くと仕方なく取り組み、一つの課題ができたときに褒めると、次の課題も取り組もうと頑張った。

「せんせい、だいすき」と1学期の最後に手紙をくれた児童もいた。4月から登校渋りがあり、毎朝下駄箱から抱っこして連れてきていた。それが、月曜日だけになり、月1回になり、2学期からは教室に一人で入れるようになった。選択性緘黙のため、コミュニケーションは筆談だが、初めて書いてくれたときは涙が出そうなほどうれしかった。周囲の先生方も優しく、「困ったときには声をかけてね」と言ってくださることが大変ありがたい。学級の子供たちも二人にとっても優しく、温かい空気が教室に漂っている。

子供たちのキラキラした笑顔を見るたびに、他の職業では味わえない体験をさせてもらっていると感じる。大学を卒業後、一般企業等で勤務してきた。小学校で勤務していくうちに、今まで経験した職業の中でこんなにも楽しい仕事はないと感じるようになった。信頼される教員になれるよう、子供たちと共に学び続け、今後も努力を惜しまず頑張っていきたい。



アンテナの高い教員を目指して

佐倉市立佐倉中学校教諭 すずき ひろき 鈴木 裕己



私は採用される以前の5年間、4校の中学校で講師として勤務していた。講師経験の中で、生徒指導の入り口は「生徒理解」であると先輩方からご指導いただいた。そして、生徒の変容に気付く目を持つことが重要だと考えた私は、「アンテナを高く」の言葉を心がけ、授業以外の時間でも生徒と関わる時間を大切にしてきた。

しかし、講師時代に見えていたものは、生徒の「改善すべき点」が多かったように感じる。生徒の誤った行動を正しい方向に導くことだけが生徒指導と捉えていたからだ。

採用一年目の昨年度、学級担任を務めたが休校から始まった年度ということもあり、生徒との距離を縮めることや生徒理解に苦しんだスタートだった。限られた時間の中で生徒理解につなげるために、生徒の良いところを多く見付け、認め、伸ばすことができる生徒指導を大切にしたい。些細なことでも生徒の良さや成長を捉えられるよう、ここでも「アンテナを高く」することを心がけた。だめなものはだめという姿勢を常に示しながらも、それ以上に生徒の良い面と向き合う一年間だった。採用二年目の今年度も継続している。

「先生は見守ってくれている」という安心感を生徒に与え、教室や学校を生徒にとって安心できる温かい空間にすることが現在の私の目標である。今後も、新しい出会いや関わりに対してアンテナを高くし、生徒と共に自身が成長し続けられるよう研鑽したい。



地域に伝わる音楽に触れ、 親しみを感じて味わう鑑賞学習

茂原市立東郷小学校教諭 志田 輝美



1 題材について

対象学年：第4学年

題材名：ちいきにつたわる音楽に親しもう

(1)題材のねらいと設定理由

本実践では、富山県民謡「こきりこ」と茂原民謡「茂原音頭」の比較鑑賞を通して、聴き取り感じ取った曲想をもとに、それらを生み出している民謡の歌い方の特徴や、旋律の動きなどの音楽の構造に着目しながら、民謡の特徴に迫り、日本の民謡や地域に伝わる音楽により親しませていくことをねらいとして題材を設定した。地域の「郷土の音楽」の楽しさや価値に改めて触れ、実感を伴いながら日本の民謡のよさや面白さを味わわせたいと考え、実践を行った。

(2)教材について

「こきりこ」は、富山県五箇山に伝わる民謡で、田楽でんがくの中で歌われてきた豊作祈願のための歌である。味わいのあるゆったりした速度で歌われ、民謡独特の節回しや母音の伸ばしによる産み字の変化などの旋律の動きが分かりやすく、日本の民謡の歌い方の特徴を聴き取りやすい曲である。また、「茂原音頭」は、地域の行事等で歌い踊り継がれてきた踊り唄である。地域の活性化を図るために作られた背景があり、茂原市を象徴する風景や産業の様子が表現されているため、歌詞の意味についても理解しやすい。また、小気味良いテンポの中にも、民謡らしい節回しや旋律の動きを感じられる曲である。同じ民謡でも、「こきりこ」とは違ったよさがあり、地域に伝わ

る民謡に親しみをもちながら聴かせたいと考えた。

2 授業実践および考察

(1)題材指導計画と授業における視点

題材のねらいに迫るための手立てとして、

- ①実感を伴いながら理解し、主体的に活用できる技能を身に付けるための授業の工夫
- ②音楽表現を創意工夫し、音楽のよさを味わって聴くことのできる授業の工夫
- ③音楽活動の楽しさを体験し、主体的・協働的に音楽活動に取り組むことのできる授業の工夫

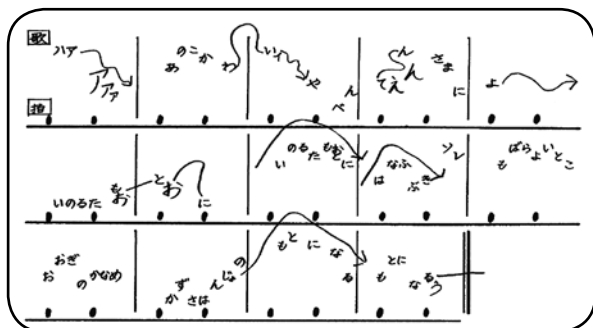
の3点に視点を置き、以下の題材指導計画のもと実践を行った。

時配	◎ねらい ○主な学習内容 ・学習活動 ☆【音楽を形づくっている要素】	○教師の働きかけ ・目指す児童の姿
◎「こきりこ」を聴き、民謡の特徴やよさを感じ取る。		
1	○「こきりこ」を聴き、旋律や歌い方の特徴を感じ取る。 ・「こきりこ」を鑑賞し、聴き取ったことや感じ取ったことについて意見を交流する。 ○歌唱や演奏の体験を通して、「こきりこ」の音楽に親しむ。 ☆【音色 旋律 呼びかけと答え】	○歌声と楽器を演奏する様子が分かる資料を視聴する。 ・歌い方の特徴や楽器の音色について聴き取ったり、感じ取ったりしている。
◎「こきりこ」の歌い方の特徴や旋律の動きの特徴を聴き取り感じ取る。		
2	○「こきりこ」の旋律の動きの特徴を感じ取る。 ・「こきりこ」の旋律の動きや歌い方の特徴を文字や線で表す。 ・ワークシートをもとに自分の聴き取ったことや感じ取ったことについて意見を交流する。 ☆【音色 旋律】	○フレーズごとの分割音源を活用し、部分的に何度も聴くことで、どの部分にどんな歌い方の特徴があるのかを、具体的に文字や線で表せるようにする。 ・民謡の歌い方の特徴や旋律の音の動きの特徴に気付き、民謡のよさについて考えをもちながら曲を聴いている。
◎民謡の歌い方の特徴やよさを感じ取りながら、「茂原音頭」の魅力を味わう。		
3	○「茂原音頭」を聴き、音楽的な特徴やよさを感じ取る。 ・ゲストティーチャーによる「茂原音頭」の演奏を聴き、歌い方の特徴や旋律の動きを文字や線で表す。 ・演奏から聴き取ったことや感じ取ったことについて意見を交流する。 ・「こきりこ」と「茂原音頭」の音楽的な特徴の違いやそれぞれのよさについて意見を交流する。 ○「茂原音頭」の曲の背景や、民謡の歌い方についてGTより話を聞く。 ☆【音色 旋律 呼びかけと答え】	○どの部分にどんな歌い方の特徴があるのかを、具体的に確認できるように、児童の気付きのあった箇所を部分的に聴くようにする。 ○旋律の動きや、声の揺れを意識させるために、体の動きで表現してみよう促す。 ・演奏のよさや曲の特徴について感じ取ったことを表現している。 ○実感を伴いながら民謡の歌い方の特徴について理解できるよう節回しなどの歌い方をGTに教えてもらい、一緒に歌ってみよう促す。

(2)授業の実際

①実感を伴いながら理解し、主体的に活用できる技能を身に付けるための授業の工夫

2時間目において「こきりこ」の旋律の動きを感じ取る場面では、民謡のフレーズごとの分割音源を活用した。部分的に同じフレーズを繰り返し聴くことで、どの部分にどんな歌い方の特徴があるのかを、ワークシートに具体的に文字や線で表すなど、民謡の特徴を可視化することができた。3時間目の「茂原音頭」の鑑賞でも同様のワークシートを用いたことで、歌い方の特徴や旋律の動きについて、演奏から聴き取ったり感じ取ったりしたことを友達と意見交流することができた。また、声の揺れや旋律の音の動きを意識させるために、体の動きを取り入れることで、民謡の特徴を楽しみながら感じ取ることができた。



児童のワークシートより

②音楽表現を創意工夫し、音楽のよさを味わって聴くことのできる授業の工夫

以下は、3時間目において「茂原音頭」を「こきりこ」と比較した場面で児童から挙がった意見である。

「こきりこ」と違うところ	「こきりこ」と似ているところ
・旋律の上がり下がり激しい→楽しく賑やか ・歯切れの良い感じ ・はずんだりズム→踊りたくなる ・囃子言葉の意味が分かりやすい	・のぼすときに旋律の動きがある ・のぼすときの声が揺れている ・地声で歌っている ・その土地の特徴を歌っている ・囃子言葉がある ・どちらも踊りがある

双方を比較することで、聴き取り感じ取ったことをもとに、それぞれの民謡の音楽的な特徴の違いやそれぞれのよさについて考えることができた。

③音楽活動の楽しさを体験し、主体的・協働的に音楽活動に取り組むことのできる授業の工夫

地域の「郷土の音楽」の楽しさや価値に改めて触れ、民謡の特徴をより感じる事ができるよう、地域人材をゲストティーチャーとして招き、生演奏による鑑賞を行った。授業の中で、節回しなどの歌い方をゲストティーチャーに教えてもらい一緒に歌ってみることで、実感を伴いながら民謡のよさや面白さを味わうことができた。

(3)考察

以下は、授業後の児童の振り返りである。

今日、佐藤先生に来てもらって茂原音頭の歌い方が分かった。また、色々な民謡が聴きたいです。	身近な茂原音頭も民謡だったことが分かった。千葉県にはもっと民謡があると思うから、色々な民謡の特徴を聴いてみたい。
---	---

本実践を通して、民謡や地域の音楽への愛着が児童の中に芽生え、今後の学習へとつながる一助となることを期待したい。実践を通し、ゲストティーチャーの生演奏を聴いたり、一緒に歌ってみたりしたことが感動となり、児童の学びへとつながったと感じた。今回は、児童に身近な民謡ということで「茂原音頭」を教材としたが、より民謡らしい歌い方の特徴やよさを聴き取ったり感じ取ったりできるような教材を選定していく必要性を感じた。本実践を生かし、児童が伝統的な音楽のよさに触れ、自分なりの思いをもち、自分とのつながりを考えながら音楽を発展させていくことができるよう、今後も授業改善を推し進めていきたい。



英語科の授業理解を深める工夫

市原市立国分寺台中学校教諭 さかまき しゅんいち
酒巻 俊一



1 はじめに

今までの授業を振り返ったときに、生徒を楽しませる活動内容の工夫に重点を置いていた。しかし、学習内容の定着や深まりまでには至らなかった。そこで、近年ではそちらに焦点を当てて授業改善を行い、その一部を本稿で扱うこととする。

2 授業理解を深める工夫

(1)授業前及び授業開始(見通し・興味・反復)

①授業メニューを黒板に書く

どの生徒も1時間の見通しを持ち、安心して学習に臨むことができる。基本的には一つの活動が平均10分程度で終わるように構成し、テンポ良く展開していく。

②英語の歌で授業を開始する

通年で行うことで、聞く・読む(音読)・話す活動に有益な、音の連結や欠落をリズムで繰り返し学ぶことができる。また、英語に苦手意識があっても歌を楽しみにしている生徒を授業に取り込むことができる。

(2)帯活動(全員参加・不安解消・種類)

①個人・ペア・班対抗・列対抗等、グルーピングを工夫し全員参加させる。各班一つミニホワイトボードを配付し活用している。

②分からないときは友達に質問可、教科書で確認可で、slow learnerを含め対応する。ただし、答えるのは本人のみとする。

③様々な能力を向上させるために、内容は多岐にわたる。伝達ゲーム(絵・写真を見て相手に伝える)、単語リレー、本文理解等。また、同じ活動でもルールや制限を変え、

生徒を飽きさせずに学習させる。

(3)マクロ的授業構成(「既習+新出」の反復)

1時間目が「①歌②帯活動③新しい文法の導入④練習及び活動1」とした場合、2時間目は「①歌②帯活動③前時の復習④活動2⑤まとめ」のように前時の復習から入る。再確認する活動を経てから、応用・発展や新出内容を上乗せしていく流れを繰り返す。

(4)ミクロ的授業構成(積み上げ式活動手順)

例) retelling活動(2時間展開)の場合

1-1 教科書本文を教科書の類似表現やデジタルエイドを用いて教師が導入(理解を補助)

1-2 New Wordsの確認及び練習

1-3 教科書本文の黙読(内容推測)及びQA

1-4 日本語訳配布及び本文の内容確認

1-5 本文の音読(複数バリエーション)

※教科書に音読した回数分★印を書き込む。repeating(教師2回・PC2回)→Read and Look Up(2回)→

友達に読めないところを質問→2分練習(2回)→overlapping(2回)

2-1 生徒と会話しながら本文の内容を確認

2-2 New Words再確認及び練習

2-3 本文の音読(複数バリエーション)

repeating(教師・PC各1回)→

overlapping(1回)→Read and Look Up(2回)→Shadowing(難易度変更2回)→個人練習(2回)

2-4 教師や友達に分からないところを質問

2-5 retellingに活用できる教科書本文の

確認(個)とretellingの一部例示(教師)

2-6 retelling練習(個)

2-7 retelling活動(ペア)

(2-8 フィードバック後、別ペアでもう1度)

(5)活動内容(意欲喚起・自己決定)

①トークバトル(3人組・競争心)

1対1でテーマに沿って互いに時間内で意見を述べ、残りの一人が勝者を判定する。時には、勝敗をつける活動も入れて授業を活性化させる。

②映画予告でリスニング(自作教材)

映画予告動画を用いてリスニングをする。生徒に「聞きたい」と思わせ、脳をアクティブにさせる(アクティブラーニング)。

③ストーリーメイキング

題材：不定詞副詞的用法「～するために」やり方

I went to the park | to play soccer.

A B

(ア)ペアに短冊を配り、一人はA側を、もう一人はB側を自由に考えて短冊に書く。

(イ)二人の短冊を合わせて一つの文にする。

例えば I study English to play tennis. のような一見不自然な文ができる。

(ウ)その文が意味を持つように、そしてその文が最後の文になるようなストーリーをペアで作って友達、クラスとシェアする。

④ALTにプレゼンしよう(タブレット使用)

題材：日本国内の旅行の先を提案しよう
班で都道府県を決定し、タブレットで調べて英語で原稿を作る。画像を1枚用意し、タブレットでその画面をALTに見せながらプレゼンテーションを行う。

⑤グループトーク

1班(6名)10分程度で、テーマに沿ってALTと会話をする。その間、残りの生徒は次のテーマに沿って英作文をする。

補助原稿は作るが本番では見ないで行う。

(6)通年指導

①語順指導と「カタマリ」の捉え方

英語を理解するためには語順の理解が最も重要であると考え、第2文型(be動詞)、第3文型(do動詞)を基本形とする。また、主語・目的語の名詞句や修飾語になる前置詞句など、カタマリで英語を捉えることや後置修飾の概念を意識して学習させる。

②活動中の振り返り

一つの活動を「前半－振り返り－後半」とすることで言語理解を深める。

③話の展開の仕方(日本語での練習含む)

英会話、英作文の授業をすると必ず話が続かない生徒がいる。これは英語力の問題もあるが、そもそもの発想力、展開力の欠乏が原因である。そこで、発想力を鍛えるためにmappingを適宜使用している。また、展開力を鍛えるために、話題のつながり、連続性を意識するような英文の作り方を指導している。例えば前の文の話題の中心を次の文で展開する。その際に5W1H(Who / What / When / Where / Why / How)を意識させる。

(展開例)

I went to Tokyo yesterday. I bought a new bag there. It is black and white. I want to use it when I go out with my friends.

3 おわりに

生徒の成長には、自信をつけさせることが大切であり、絶えずチャレンジしながら私も学んでいる。本稿の内容もこれからまた修正、改良が加わるであろう。

今の課題は、各授業の振り返りをどうするかである。